

令和4年度

あくた み まち や い せき

# 芥見町屋遺跡現地見学会

令和4年11月26日（土）13：30～

主催：岐阜県文化財保護センター



## ① 令和4年度発掘区全景（南東から）

### ●遺跡の概要

芥見町屋遺跡は、岐阜市東部、長良川左岸の自然堤防<sup>しぜんていぼう</sup>上に立地する、弥生時代から江戸時代までの遺跡です。これまで岐阜市教育委員会や当センターなどによって、断続的に調査が行われています。昭和47年の調査では、昨年度の発掘区に隣接した場所で弥生時代終末期から古墳時代初頭の<sup>たてあな</sup>竪穴建物が5軒確認されています。平成22年の調査では、今回の発掘区から北西に約700mの長良川堤防沿いで、鎌倉時代から明治時代にかけての建物跡、溝、井戸、土坑などが見つかるとともに、現代の地割が中世にまで遡<sup>さかのぼ</sup>る可能性が示されました。今回の調査は、国道156号岐阜東BP建設事業に伴う2年目の発掘調査となります。昨年度の調査（1地点）では、弥生時代後期～古墳時代初頭と古代の竪穴建物跡の他、中世の土坑や井戸、近世の郡上街道<sup>ぐじょうかいどう</sup>と考えられる道路跡などを確認しました。

### ●芥見町屋遺跡データ

所在地：岐阜県岐阜市祇園1丁目

調査面積：2,275.3 m<sup>2</sup>

事業者：国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所

事業名：国道156号岐阜東BP建設事業

調査期間：令和4年5月～12月上旬

## ●調査の成果

今回の発掘区は遺跡の南端である山田川に接した位置にあります。そのため、発掘区南部ほど遺構・<sup>いこう</sup>遺物が少なくなる状況を確認できました。以下に、時代ごとの様相について紹介します。

**弥生～古墳時代** 1地点ではこの時代の遺構が中心であったのに対し、今回の調査ではほとんど認められませんでした。3地点では遺構の重複が激しいため、この時代の遺構が滅失した可能性も<sup>めっしつ</sup>ありますが、出土した遺物も極わずかでした。そのため、この時代の集落は、今回の調査地点までは及んでいなかったと考えられます。



図 1 芥見町屋遺跡位置図

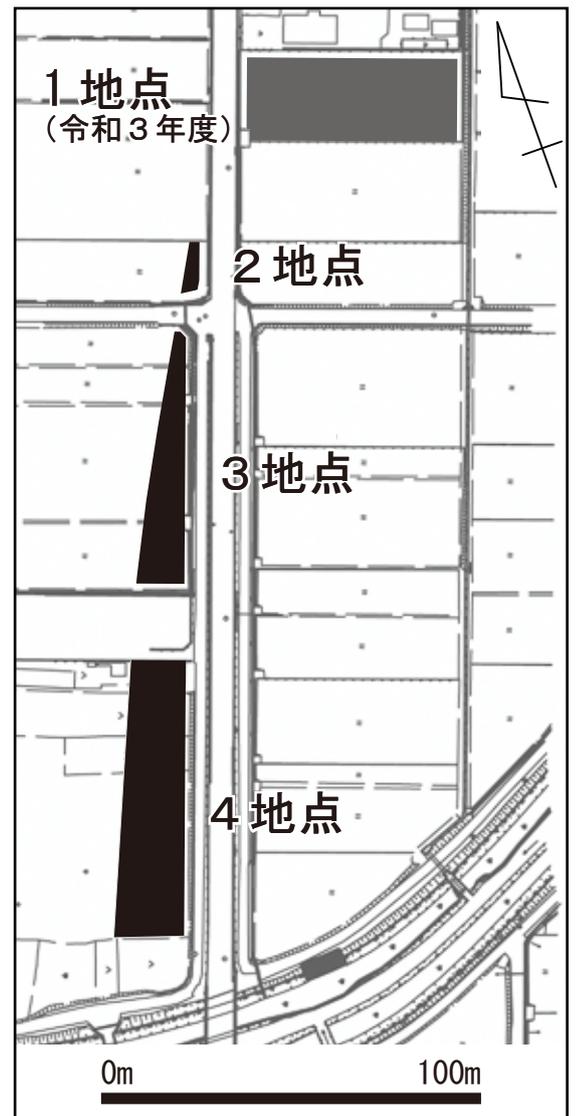


図 2 発掘区位置図

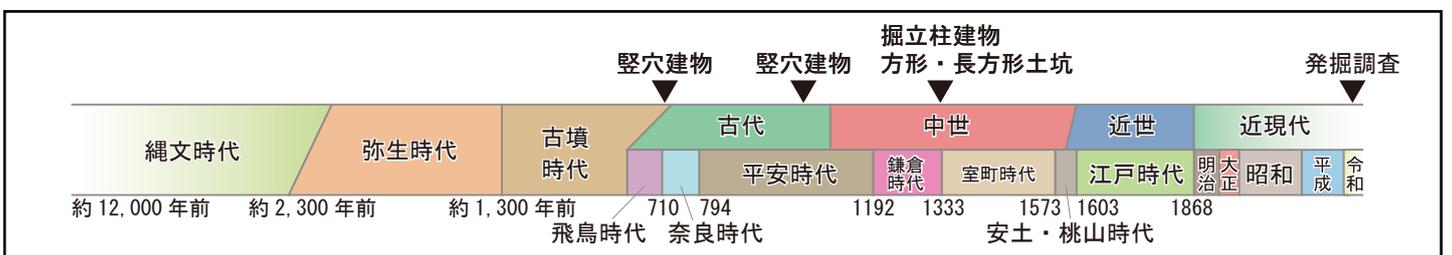


図 3 芥見町屋遺跡と年表

(凡例)



飛鳥～奈良時代

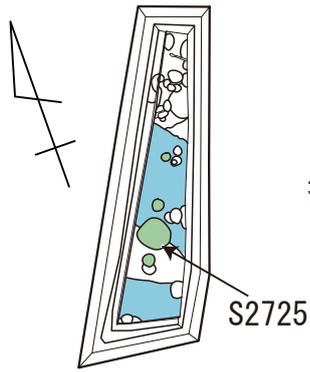


平安時代



鎌倉～室町時代

## 2 地点の調査



0m 10m

掘立柱建物 1

S2725

S1138

S1296

S1290

用水路跡

S1355

用水路跡

S1420

0m 10m

## 3 地点の調査



⑤ S1296 床面完掘状況

カマドを伴う 8 世紀後半の竪穴建物



⑥ S1296 遺物出土状況

床面から須恵器壺や土師器甕などが出土



⑦ S1290 他完掘状況

東西方向の大溝を複数検出



⑧ S1138 遺物出土状況

方形土坑の底面から山茶碗が出土



② S2725 炭化物出土状況

土坑の底面に炭化物が広がって出土



③ S1355 遺物・礫出土状況

竪穴建物床面から土器小片がまとまって出土



④ S1420 カマド完掘状況

東壁に構築された煙道部の残るカマド

## 4 地点の調査

(凡例)



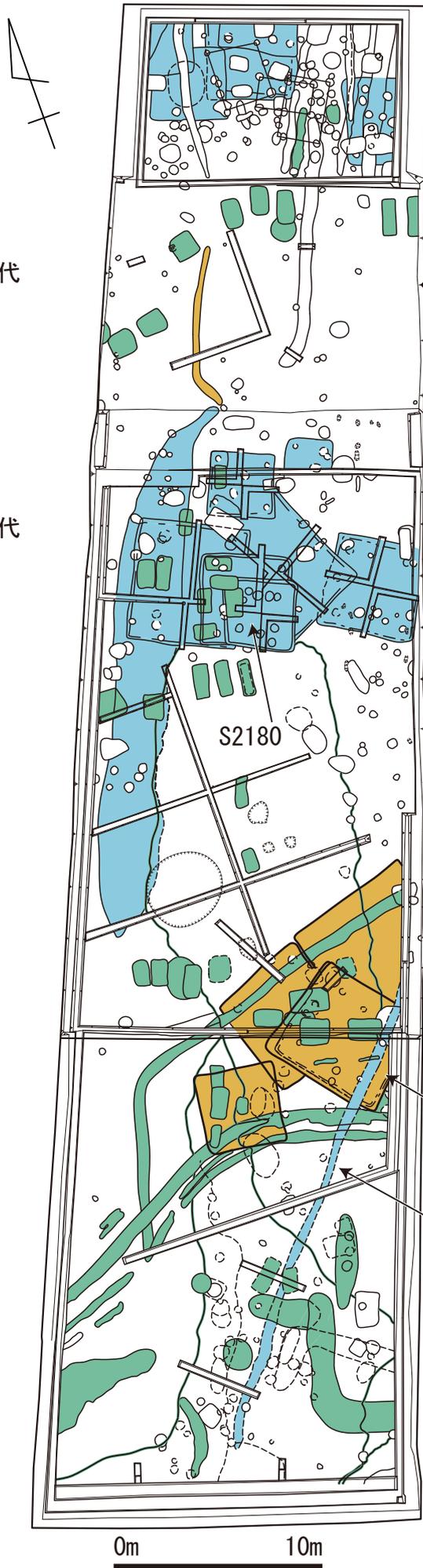
飛鳥～奈良時代



平安時代

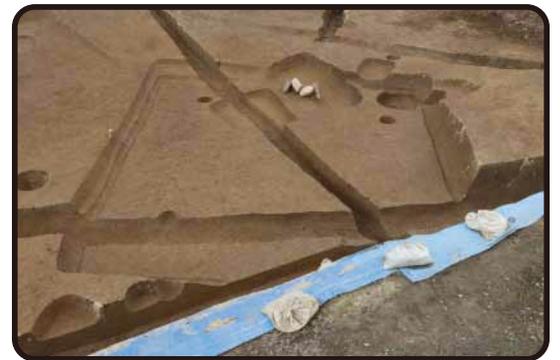


鎌倉～室町時代



### ⑨ S2180 他完掘状況

竪穴建物を重複して確認



### ⑩ S2320 床面完掘状況

カマドを伴う竪穴建物



### ⑪ S2320 カマド検出状況

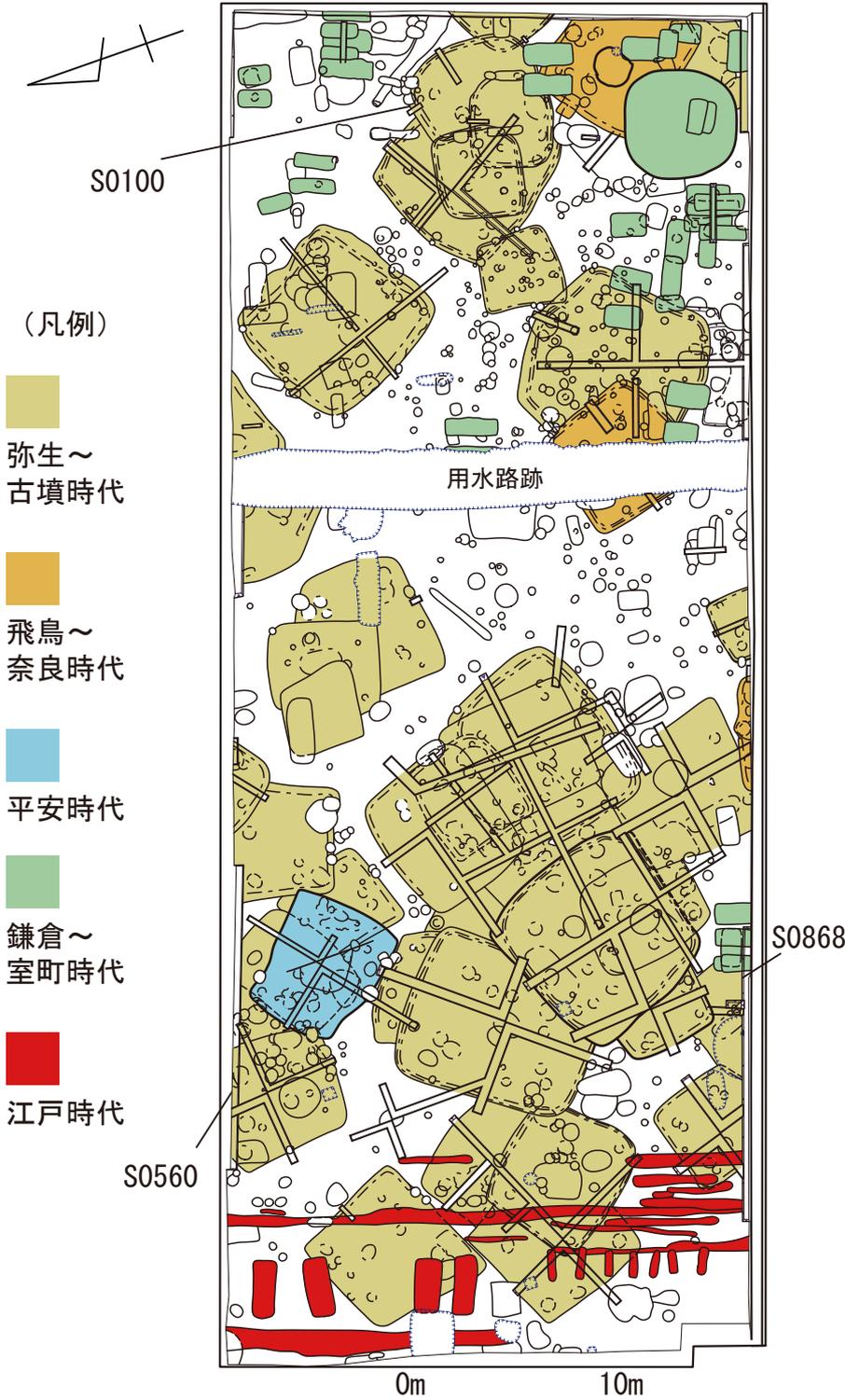
カマドの袖石と横掛石



### ⑫ S2315 完掘状況

自然流路の窪みに沿った溝

1 地点の調査（令和3年度）



⑭S0256 断面状況

井戸の堆積状況



⑮S0980 床面完掘状況

貼床を伴う竪穴建物



⑯S0868 遺物出土状況

竪穴建物の床面から出土した壺と甕



⑬S0560 カマド遺物出土状況

カマド内から土師器甕が出土



⑰S0100 遺物出土状況

焼けた円形の土坑から土師器甕が出土

**飛鳥～奈良時代** 3・4地点で竪穴建物を10軒のほか、土坑や溝などの遺構や遺物を確認しました。遺構や遺物を確認しました。竪穴建物のうちカマドを備えたものは2軒で、いずれも北壁に沿って構築されていました。カマドやカマド周辺の土坑からは、須恵器の甕、壺、横瓶の他、土師器の甕、甑などが出土しました。

**平安時代** 3・4地点で竪穴建物30軒のほか、土坑や溝などの遺構や遺物を確認しました。年代は10世紀以降の平安時代後半に当たる時期と考えられますが、時期の明確な遺物が少なく、詳細は検討中です。なお、県内においてこの時期の遺構・遺物は非常に少ないため、今回の発見は貴重な事例と考えられます。飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物と比べると、特定の範囲に集中して何度も建て替えられていること、建物の方位が揃わないこと、支柱穴や壁際溝を除いて床面の付属遺構がほとんど認められないことが相違点として挙げられます。また、ほとんどの竪穴建物にカマドがなく、カマドを持つものは1軒のみでした。

**鎌倉～室町時代** 3・4地点で同じ規模の方形や長方形の土坑が2基～4基が並んだ状態で複数見つかりました。1地点の調査でも同様の土坑を多数検出しており、この時期の遺構が広い範囲に及ぶことが明らかとなりました。土坑の底面から完形の山茶碗の碗が見つかった例も認められたことから、これらの土坑はお墓であった可能性があります。このほか、3地点では昭和40年代の耕地整理で埋められた水路と同じ東西方向に延びる溝が複数重複して見つかりました。また、4地点では埋没した自然流路の影響で窪んだ地形に沿って北東から南西方向に延びる溝を1条確認しました。これらの溝と同じ方向の地割が耕地整理前の字絵図や航空写真でも認められることから、耕地整理前の地割はこの時期まで遡る可能性があります。

**江戸時代** 今回の調査では郡上街道と考えられる遺構は確認できませんでした。これまでの調査結果や字絵図による復元を踏まえると、発掘区東側の現道と重なっている可能性が高いと考えられます。

## ●宇野隆夫帝塚山大学客員教授のコメント

弥生時代後期から古墳時代初頭の集落が今回の発掘区まで及ばないことは、当遺跡における当該期の集落構造を考える上で非常に重要な成果である。今後の周辺の調査に期待したい。飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物は散在的な状況が確認された。この頃の一般的な集落遺跡では群集して竪穴建物が確認されることが多いのに対して対照的な状況であり、当遺跡の立地から、街道や水運に関連する特殊な集落の様相を示している可能性がある。遺跡に近い国史跡「老洞・朝倉須恵器窯跡」の存在も注目される。平安時代は、後半期の集落遺跡が全国的に発掘調査によって捉えづらい中で、複数の竪穴建物が重複して確認されたことは重要である。中世に位置付けられる長方形や方形の土坑は墓の可能性もある。昨年度の調査地点も含めて広範囲に及ぶ墓域が展開していたと想定される。